

云當召長吉良吉了不能結故下叩頭言阿休¹²（呼母聲也）¹² 且病篤不願去緋衣入笑白帝成白玉樓立
 召君為記天上差榮不苦也長吉獨泣邊人羞見之少之長吉氣絕長所居室中勃勃有烟氣聞行車鳴管之響
 太夫人急止人哭待之如炊五斗黍許時長吉竟死王氏非能造作編長吉者實所說如此嗚呼天蒼蒼而高
 也上果有帝耶帝果有苑園宮室哉聞之玩邪苟信然則天之高邈帝之尊嚴亦宜有人物文彩愈此也者何獨
 番番于長言而使其不壽邪噫又世所謂才而奇者不病地上少邪天上亦不多邪長吉生二十四年位不過奉
 禮太常中當時人忌亦多排擯毀辱之又誰才而奇者帝獨重之而人及不重邪又豈人見會勝帝邪²³

二の文の注としては一清一馮浩「英蘭文集箋註」かくわしい。本文も少し異同がある。それを
 左に記しておく。

- 1 按長吉事蹟無多而宋史藝文志傳記類曰李商隱李長吉小傳五卷是誤一為五也
- 2 延書傳李賀字長吉宗室鄭王之後
- 3 按賀自疑有名父名晉備以是不死進士畧為之作詩詭辭竟不試誠
- 4 按奉元新德書州本作恭元而文粹作參元且本集漢陽公表有云參弟參元矣補子厚賀王參元失火書
 中云京城人多言足下家有積財士之好聚者皆畏忌不敢道足下之蓄亦與茂元家積財相合也柳書當
 為元和十年以前永州司馬時所作然則參元惠舉久而不善矣長吉姊妹王氏者疑即參元所娶
- 5 新書楊敬之元和初擢進士第轉大理卿檢校工部尚書兼祭酒卒
- 6 舊唐書德興傳子成中書舍人
- 7 新書崔植長安初同中書門下平章事

8 疾馳を馮註け距離とし、いう。按廣雅註馳獸似驢也故用之或作驢新

9 一作探談

10 新書傳多採此文

11 舊書傳手筆敏捷尤長於談論其文思麗奇而崇峻瑣瑣無切趣元嘗所文士從而效之無能髣髴者其衆
府詞數十篇至於靈龍樂工無不諳諳新書志寺製集五卷宋史志李賀集一卷又外集一卷耳

12 秋之馮註訂委とし、いう。一作瀟原注長吉學詩時呼大夫人云廣韻琴武移切齊人呼母。乃お本

誌A遊記・5 V阿婆など参照。

13 一紙二字誤

14 困學紀聞曰天官書云熱五斗水填句本於此

15 長乏馮註け常とする。

16 一作團

17 一作卷卷誤

18 邪を馮註け耶とし、いう。一作即連下句讀義。乃お以後にみ之る邪字もまた馮註けは又な耶
とする。

19 按舊書傳作二十四據此文也新書傳作二十七據杜牧所作李賀詩集序也杜之序作於太和五年辛亥
而曰賀死後十五年也則當卒於元和十二年丁酉賀歸之主年未可遽考故二十四二十七未定孰是新書
傳七家於詞彙體感皇南漫始聞未屆過其家使賦詩繼後筆而就自目曰高軒過此蓋采自唐詩言也然

別×七七

許云魏眉揚客賦秋蓬誰知死草生華感我今垂如附翼其非七歲明矣近人與江沈聚等注昌谷詩而謂此為正履避嫌名不敢舉道士之時等語蓋一十有九余以高軒運題下陳注雖屬外愈皇庫侍御漫見過考之轉於元和四年六月改葬高麗外郎封東都省五年為河南令六年行職方員外郎至京師七年兼國子博士八年改郎中又宣甫之稱侍御亦可細考何時新嘗所敘甚略且雜亂然有云愈令河南等處之而留樂有河南府試樂詞則並書許李必元和四五并事故詩曰東京才子文章鉅公也其為贊非七歲尤明則當作二十七為是

20 萬壽傳補太常寺協律郎按舊唐志太常寺署奉禮郎二人從九品上協律郎二人正八品上舊當以奉禮升協律

21 一無中字

22 忌字為註に方し、あるはうがよいだろう。

23 笠澤業書李賀小傳後吾聞淫歌漁者說之蘇天物天物不可累又可扶櫛剝削露其情狀乎使自詠即外至于痛死不能復天能不致附耶長吉大樂野狐玉容生信不挂朝籍而死正坐長哉正坐是哉按會望云內壹舉則外揚為贊皆今端其詞初心非獨入隨處傳也斯亦假以自欺歟

入余丛 14 唐 趙璘 因話錄 中國文學參考資料小叢書第一輯 3 古映文學出版社

元和以來、詞翰兼奇者、有柳柳州宗元、劉尚書禹錫及楊公、劉、揚二人、詞翰之外、別稱篇什、又張司業籍蓋行、李嗣業為新樂府、當時言歌篇者、宗此二人、(卷三)進士孝為作泐賦、及輕薄暗小囚佩、李嗣作樂府、多憂慮花草蜂蝶之間、二子竟不遠大。文字之作

可以定相命之優劣（、）

× 「出版説明」に「因話録六卷、趙瑛撰。趙瑛是唐德宗時宰相趙宗儒的姪孫、昭宗討趙佐的兒子、南中善族柳氏的外孫、家世顯赫、多識朝廷典故、嫻於旧事。所記唐人故事頗為豐富、且文筆流暢、四庫全書總目提要說：『其書體近小說、而往往足與史傳相參』……柳海本校與、並用唐語林等書校勘。都改正了一些明顯的錯誤。』と記す。譯正堂『中国文学家大辞典』には次のように記す。

瑛字次章、南陽人、後徙平原。生卒年均不詳、約唐武宗會昌中前后在世。家世顯貴。開成三年（公元八三八年）擢進士第。大中七年（公元八五三年）為左補闕。宣宗常索科名記、瑛顯令瑛所訪諸家科目記、撰成十三卷、進之。後為滑州刺史。瑛著有因話録六卷、表狀集一卷、（均新唐書藝文志）並伝於世。

△ 奈 15 √ 唐 張 固 幽 關 鼓 吹 四 部 集 卷 子 部 顧 氏 文 房 小 說 （ 明 刊 本 景 印 ）

李藩侍部嘗綴李賀歌詩為之集序未成知賀有表兄与賀筆硯之旧者召之見託以搜訪所遺其人敬謝且請曰某尽記其所為亦見其多點竄者請得所著者視之當為改正李公喜併付之彌年絕跡李公怒復召詰之其人曰某与爾中外自小同处恨其傲忽常思報之所得兼旧有者一時投於滄中矣李公大怒叱出之嗟恨良久故賀補什流佞者少

李賀以歌詩謁韓吏部吏部時為國子博士分司送客臨極困門人呈卷解帶焚讀之首篇獨門大守行曰黑雲壓城城欲摧甲光向日金鱗開却披帶命逐之

× 「唐代叢書」(嘉慶十一年刊本景印)に収める「幽南鼓吹」との文字の異同を左に掲げる。

刊 × 七

- 6 一攻を亦工とする。
- 7 常交結于爾を常願結交贊とする。
- 8 不容を不容とする。
- 9 入を令とする。
- 10 及膝を擗箒とする。
- 11 指を相國とする。
- 12 祖を祖禰とする。
- 13 不合亮挙を不合亮進士挙とする。
- 14 致を成とする。
- 15 韓愈を文公とする。
- 16 不成名を不成事とする。

・譚氏前掲書にいう八康駢（撫言作唐駢、新唐書志及宋史志均作康駢）字駕書、池陽人、生卒年均不詳、約唐僖宗光啓中前后在世、乾符四年（公元八七七年）登進士第、官至崇文館校書郎、駢著有制誥錄三卷（新唐書藝文志）及九重雜編十五卷（宋史藝文志）並存世。V

右にいう撫言（王定保「唐撫言」の記事は卷二「置等第」の項にみえる。

李賀文獻目錄稿 (一)

この稿(一)では、一九〇〇〜一九六〇年に発表された李賀文献でわたしが気づきカードに書きこんだものを列挙する。

文献そのものを見ていない例は多く、見ているも、それについての記載法が不統一で、補正しなけれはならないが、いまはとりあえずそのまま書きとめておく。

陳璧如等編『文学論文索引』(国立北平図書館、民国二十一年)劉修業編同統編(同、民国二十二年)同三編(同、民国二十四年)中国科学院历史研究所第一、二所、北京大学历史系合編『中国史学论文索引』(科学出版社、一九五七年六月、十二月)によつたものが多いので、それらを①②の略号であらわすことにする。

わたしの気づかぬものについて大方の教示を乞いたい。

1 長爪郎を論ず 久保天随(得二) 帝國文学 一九〇〇年(明治33)ハ1-10月

2 李長吉を論ず 辻撥一? ?

以上二条は草森紳一氏に教えられた。本誌第七号『二〇世紀の李賀(三)』をみよ。

3 支那文学史 久保得二 早稲田大学出版部? 『二〇世紀の李賀(三)』をみよ。

4 昌谷別伝並注 田北湖 国粹学報四卷六期(43期)

この雑誌は一九〇五年、上海國粹学報社から創刊された。ハ此杂志于每一年中皆折取原帙、按类彙訂、所以各图书馆所藏此杂志、有原印原装本和重印彙訂本两种。本索引据原印原装本著录、

原裝本稱某年（甲申子年）第几号、又附注第几年發售干期、（如現任采志稱某卷第几号）本索引係第几卷代表某年、稱第几期代表每年中之第几期。北大圖書館藏有第一年至第七年之原印裝裝本。V⑤注（上、31ページ）。

5 中國大文學史 謝無量 中華書局 一九一八年（民國7） 第四編第七章第二節李爾到寒強（卷七30く32ページ）

6 李長吉の象徴主義的傾向 齋藤祐 第三高等学校嶽水會雜誌 一九二〇年？
「二〇世紀の李爾」をよ。

7 跋李長吉評注 吳聖生 四存月刊一二期 一九二二年九月 ⑤下
8 李長吉与月 熊裕芳 學灯 一九二四年三月三〇日、四月二日

八 學灯 上海時事新報副刊 收一九二二年四月份—一九二五年五月份（附于時事新報内、學灯于每月終裝訂成冊本卷）V⑤上。

9 詩人李長吉之詩 周蘭風 學灯 一九二四年七月二十九日
八 內容：（1）編者語 （2）長吉的詩境 （3）從長吉詩中所獲得之李長吉 （4）長吉詩中所表現的思想 （5）長吉之寫景詩与絶句 （6）結尾 ⑤。

11^x 李長吉的詩 蘇雪林 文哲季刊一期 上海羣衆圖書公司 一九二七年（民國16）一〇月
「二〇世紀の李爾」をよ。

12 李長吉新意 夏算服（日夏取之助、樋口國登） 報天苑（パンテオン）一號 東京第一書房

- 19 没落貴族的詩人李長吉 致于 文学雜誌(北平) 一号 一九三三年四月
 〆文学杂志(北平) 北平文学杂志社編輯、西北行局発行 一九三三年創刊。V⑤
- 20 李賀之死 洪為法 青年界 五卷二期 一九三四年二月
 〆青年界(月刊) 石氏、趙景深等主編、上海北新書局出版 一九三一年三月創刊V⑥
- 21 李長吉年譜 閔崇璩 清華大學畢業論文 一九三三年夜
 後出の朱自清『李賀年譜』に見える。
- 22 李賀年譜 朱自清 清華學報 一〇卷四期 一九三五年一〇月
 李賀の年譜の基礎をなすものとしてよいだろう。『文史論著』(香港太平書局、一九六二年)などにも収めらる。
- 23 李賀年譜補記 朱自清 清華學報 一一卷一期 一九三六年一月
- 24 漢詩選読妄解 佐藤春夫 改造 一九三六年(昭和一一)二月
 李賀の将進酒・巫神樹の解をふくむ。
- 25 詩人李賀(国学小叢書) 周樹風 商務印書館 一九三六年六月
- 26 李賀 金築新蔵 大百科事典 二六、一 平凡社 一九三九年一月
- この版は新装分冊というから、原版に同じ記事があるはずである。文学史・事典などに李賀に關する事項がのっているだろうと思うが、わたしの見及ぶものけきわめて限られ、記録したものはまたそのうちの幾分にすぎない。

27 唐詩及唐詩人(下) 小杉放庵 初版卷末言日付 一九三九年九月

康楽書社から一九四七年に、角川文庫として一九五三年に出ている。

28 李長吉の生涯 稲田尹 臺大文学 五卷二号 台大文学会 一九四〇年五月二八日

29 李長吉 原田憲雄 竜谷大学文学部卒業論文 一九四一年一月二三日

本誌創刊号に収める。なお前条の稲田論文については本誌五号の「稲田尹『李長吉の生涯』」をみよ。

30 李長吉を論ず 橋本備 支那学特別号 一九四二年四月

『中国文学思想論考』(大阪秋田屋 一九四八年二月)に収める。

32 玉笛賦(支那詩選) 佐藤喜夫 東京出版株式会社 一九四八年四月二五日

集種積、蘇小小墓を収める。講談社版『佐藤喜夫全集』には、これも、さきの「漢詩漢語妄解」も収めている。

31 梅月大師の生涯と藝術 小林太市郎 大阪創元社 一九四七年三月十五日

33 唐詩研究 豊田儀 養徳社 一九四八年八月一〇日

34 白玉楼中の人―李長吉をめぐって― 原田憲雄 方向 一号 一九五三年三月二〇日

35 李長吉詩鈔 原田憲雄 方向 一号

36 白玉楼中の人 原田憲雄 水鏡 一九五三年六月

水鏡は短歌結社である東京水鏡社発行の月刊誌。

- 37 露滴 原田憲雄 大衆 一九五三年七月
大衆社京京西本願寺の發行する月刊誌。
- 38 筆神造化天無功―李長吉をめぐって― 原田憲雄 方向 二号 一九五三年八月二五日
- 39 豊谷詩 原田憲雄 方向 二号
- 40 福機―李長吉をめぐって― 原田憲雄 方向 三号 一九五四年二月一日
- 41 夫人飛入瓊瑤台―李長吉をめぐって― 原田憲雄 方向 四号 一九五四年九月二五日
- 42 離歌 原田憲雄 方向 四号
- 43 李長吉の色彩感覚―「紅」と「緑」に代表されるもの― 石川一成 中国文化研究会（東京
教育大学） 四期二号 一九五五年三月
- 44 石破天驚逗秋雨―李長吉をめぐって― 原田憲雄 方向 五号 一九五五年八月一日
- 45 李賀の詩―特にその色彩について― 荒井健 中国文学報（京都大学） 三册 一九五五年
一〇月
- 46 李賀とScafs 工藤圓太郎 英語青年 一九五六年三月
- 47 詩吟と象徵―李賀の表現手法について― 上原龍介 九州中国学会報 二号 一九五六年五
月
- 48 夜の詩人 上原龍介 中国文芸座談会ノ十 一〇号 一九五六年六月
- 49 幽賦集（中国詩選） 原田憲雄 方向社 一九五六年七月五日

- 50 明月珠 原田憲雄 方向 六号 一九五六年九月二五日
- 51 補志—李長吉をめぐって— 原田憲雄 方向 六号
- 52 帰郷—李長吉をめぐって— 原田憲雄 方向 六号
- 53 李賀の鬼詩とその形成 和田利男 群馬大学紀要人文科学編 五 一九五六年
- 54 論李賀の詩 陳貽焯 文学遺產増刊 五輯 一九五七年二月
- 55 李賀と孟郊—孤高の竟談をめぐって— 上尾龍介 九州中国学会報 三 一九五七年三月
- 56 古詩初探 李慕言 上海古籍出版社 一九五七年三月
- 57 「李賀と晚唐」 「詞的起源与唐代政治」 「李賀詩考釈」 をふくむ。
石川一成 「李長吉の色彩感覚」 李慕言 「李賀と晚唐」 「詞的起源与唐代政治」 「李賀詩校釈」
上尾龍介 「苦吟と象徴」 「李賀と孟郊」 「夜の詩人」 荒井健 中国文学報 七册 一九五
七年一〇月
- 58 唐李賀の生卒年問題 梁子逵 中央日報 一九五七年一〇月一日
- 59 中国の古典詩(座談会) 土岐善喜・西脇順三郎・吉川幸次郎 図書新聞 四二三 一九五七
年一二月二日
- 60 平松集(中国詩選) 原田憲雄 方向社 一九五八年一月一二日
- 61 隋唐五代文学史 周祖谟 福建人民出版社 一九五八年八月
- 62 幽版 原田憲雄 方向 八号 一九五八年九月七日

- 63 李賀 荒井健 世界大百科事典 二九卷 平凡社 一九五八年一〇月
- 64 李賀詩集 葉葱奇編訂 北京人民文學出版社 一九五九年一月
- 65 三家評注李長吉歌詩 上海中華書局 一九五九年一月
- 66 李賀(中國詩人選集14) 荒井健 東京岩波書店 一九五九年二月
- 67 李賀の飛翔 福田紀一 中國詩人選集月報16 一九五九年二月
- 68 唐代詩歌 王士禛 北京人民文學出版社 一九五九年四月
- 69 中國文學史稿 吉林大學中文系中國文學史教材編寫小組 一九五九年六月序 采華書林
- 70 書評(三家評註李長吉歌詩) 齊甘 學術月刊 五九一七 一九五九年七月
- 71 李賀的錦囊(文學小故事) 以寧 萌芽 五九一二〇 一九五九年一〇月一六日
- 72 試論李賀及其詩歌 羅正璧 紀談華 人文雜誌 一八 一九六〇年二月二五日
- 73 李賀和他的詩 王孟白 光明日報文學遺產 三〇二 一九六〇年二月二八日
- 74 荒井健「李賀」葉葱奇「李賀詩集」 柳磨宏 中國文學報 一二冊 一九六〇年四月
- 75 頌歌—李長吉をめぐって— 藤田憲雄 方向 九号 一九六〇年八月二九日
- 76 必須別除李賀詩中的糟粕—兼評王孟白同志(李賀和他的詩) 殷晉培 光明日報文學遺產 三三六 一九六〇年一〇月三〇日
- 78 芸術の理解のために 小林太市郎 淡交社^新 一九六〇年十一月三日
- 79 李賀雜考 奥野信太郎 滝井博士頌壽紀念「東洋思想論叢」 一九六〇年十一月

景愛 小林太市郎博士書簡抄

朔・九〇

八まえがきV ついこのあいだのことにしお慰えない小林博士の逝去が、すでに十年以前のことであった。一九六四年、博士の一周忌を前にして、わたしは『景愛小林太市郎博士書簡』を編んだ。わたしとわたしの弟原田禹雄にあてた博士の書簡四十八通を油印した三十五ページの小冊子である。はしがきにいうように八箇中にちりばめられた中夏の詩文に關する評語は、その一つ一つが『王維の生涯と藝術』や『嵯月大師の生涯と藝術』のような独創的な大著を生み出すべき、貴重な種子Vであり、なかでも李賀に關するものは、古今の評家の未だ言いえなかつた卓見だと思ふ。この書簡集は小評数しか刷らなかつたので李賀を愛する方々に読んでいただきたく、左に抄出する。八文中しはしはわたくしどもの作業に対する過褒の語がみえて面はゆいけれど、実は博士はそのことによつて、わたくしどもの至らぬところを示し、進んで未知の宏大な世界へみちびかれたのである。読む人はただちに事情を奮取せられるに違いない。V

一九七三・八・一六

1 「方向」を頂戴しまして早速拝読。……酒不到劉伶墳上土は、そこに到らないものを言うことによつて、そこに到るものを示したのではないでしょうか。すなわち、現実の酒は死者に飲めないけれども、詩句の酒はよく盛壇の人を享樂せしめる。現実の榮華に沈溺する嶺公子は李賀